
管理局戦争

ヤマグチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

管理局戦争

【Nコード】

N7818Z

【作者名】

ヤマグチ

【あらすじ】

大東亜戦争での屈辱の敗戦から奇跡の復活を遂げた日本は、遙か外宇宙からやってきた帝國という巨大国家の後ろ盾を得て、着々とその力を蓄えつつあった。【昭和】という時代を歩み、誇りを取り戻した日本に突如として高町なのは達魔法使いが現れる。彼女達によって引き起こされる凄惨な事件の数々、その時、政府のとる行動は……。そんな筆者の妄想をだらだらと書き連ねた作品です。細かい設定はBlog <http://blog.goo.ne.jp/yatteran> の方に掲載しておりますので気になった

方はこちらでお調べください。

接触編1（前書き）

このSSは無印開始前に分岐したif物としてお読みください。また個人的になのは無印以外すべて見たことがあります。知識はすべてネット上から得たものだったり筆者の妄想で出来ていたりします。それとこのSSはアンチ・ヘイト作品です。各キャラや作品に強い思い入れのある方は絶対にご覧にならないことをお勧めします。あと筆者はSSを書くのが今回初となるため、矛盾や、文書の構成などにおかしな点が多々見受けられると思います。その辺を理解した上で、それでも構わないという方のみSSをご覧ください
さい 以上

接触編 1

彼らは、文明の勃興から今日に至るまで、絶えずその勢力を増大させ、自民族の拡散・新たなる資源、新たなる領土の確保に勤めてきた。

その間、さまざまな出来事が彼らを待ち受けていたが、その多くは、自らの文明／テクノロジーを発展させることで、それに立ち向かい、ほとんどの苦難を打ち破ってきた。

だが、ある時、彼らはその広大な空間に、自身達の文明しか存在していないことにふと気がつく。

あらゆる資源、数多の領土を欲した彼らが次に求めたもの、それは、自身達の良き隣人であった。

永劫とも思える時間が過ぎ去る過程で、彼らは幾度も期待にその胸を膨らませ、根気良く自らの隣人を探し続けていた。

中には、もしやという希望を抱かせる出会いもあることにはあったが、大半は期待外れの内容であり、そのたびに彼らを落胆させている。

建屋はあるが、その中に肝心の隣人がいない、痕跡だけは数多く残っていたのだが……。

半ば諦め掛けていたその時、彼らの元に待望の知らせが飛び込んで来る。

それは、自身達の住む地より遙か遠方、遙か彼方、別の銀河に存在していた。

【改訂】管理局戦争 序章 接触編1

昭和20年、日本帝國は原爆の投下から屈辱の敗戦を迎え、その辛酸を舐めながらも、朝鮮戦争特需による好景気を経て、時の吉田茂首相の下、各国との国交を回復、翌、昭和27年にようやくその独

立を回復することに成功していた。

そこから、1970年代、昭和37年に至るまでの間に、東京オリ
ンピックの開催、日本万国博覧会、沖縄の国土復帰、高度経済成長
への突入という、国家としては奇跡とも呼べるほどの急速な経済・
国威の回復を見せることになる。

きしくも、70年代に突入する前年、1969年7月20日、米
国が推進するアポロ計画は、月に人類を送り届けるとい
う大偉業を成し遂げており、それに触発される形で、日本
国の目も次第に宇宙へと向けられるようになっていった……。

昭和47年（西暦1972年） 8月6日 日本国 野崎山宇宙電
波観測所

野崎山宇宙電波観測所、それは日本国科学技術省が管轄下に置く、
宇宙から飛来するあらゆる電波を観測することを目的とし、昭和4
5年、日本国の宇宙進出、その足がかりとするための基礎データ
取得することを目的に設置された研究所であった。

ここでは、太陽フレアのメカニズム解析から、放出される電磁波が精密機器や人体にどのような影響を及ぼすかの研究、電波による別銀河の観測などが中心に行われている。

前年には最新型である17GHzの電波偏波計が稼働、当時の学界から多くの期待を寄せられてつつ試験運転が繰り返され、つい先月本格的な運用が開始されたばかりであった。

しかし、本格稼働からわずか半月余りで突如として算出されるデータにノイズが乗り始めることになる。

当初は放送電波による干渉なのではないかと考えられていたが、観測所自体が八ヶ岳山麓、秩父山地に囲まれ放送電波によるノイズが少ないことを理由に建設されていたため、この考えは即座に否定されることとなる。

ジージーという、うるさいぐらいに蝉の鳴き声が木霊する中で、ジリジリと肌を焼く日差しに照らされながら、作業服に身を包んだ数名の人影が大型のアンテナの下に歩いてゆく。

「それにしても、一体このノイズ元は何なんでしょうね？」

工具箱を手にした比較的年若い作業員が、うだるような暑さに辟易しながら、うんざりした様子で隣を歩いている年配の作業員に声をかける。

「それがわかれば、俺たちだってこんな苦労はしてないさ、学者先生方が言うには、定期的な周期で現れるノイズらしいな。」

アンテナをその視界に収めながら、年配の作業員はここに来るまでに研究所の職員から聞いた内容を交えつつ、若い作業員に相槌を打つ。

「確か、その周期ノイズせいでうちの機器の故障が疑われてるって話ですよね？」

別の作業員が心外だといわんばかりの声を上げるが、年配の作業員

は彼をちらりと一瞥しただけで、そのまま歩み続ける。

「お前の言いたいこともわからなくてもないがな、疑われてる以上は、俺たちの作ったものに間違いはないってことを証明せにゃならん。それが仕事ってもんだらう。」

確かに、年配の作業者の言う通りである。身の潔白を証明する。彼らの作り上げた作品に対するプライドがかかっていた。

「さあ、みんな、アンテナまでもうすぐだ。チェックが終わったら、今度は研究所内の計器総チェックだぞ！！」

彼の力強い言葉を受け、みな足の取りが少し軽くなる。彼らは照りつける日差しの元、緩やかな傾斜をぐんぐん上っていった。

ここ3日ほど、システムの製造を担当した七木アンテナや、この手の設備に詳しい研究者らが集まり、設備の点検や部品の交換など、疑わしき部分の徹底した調査が行われているが、ノイズ発生の原因はいまだ不明のままであった。

しばらくまともな睡眠を取っていない彼らは、心身ともに疲労が蓄積している状態で、彼らの基地となっている仮眠室は、さまざまにデータが記録された資料が散乱し、そのさまはまるで戦場あとの様相を呈していた。

まるでごみためのようになってしまった仮眠室の一角で、3人の研究員が分厚いデータの紙束をめくりつつ頭をかきむしっている。

「あああああ」~~~~~、わからん！ なんなんだ？ 何が原因なんだ！？」

一人が唐突にデータの束を放り投げ、仰向けに倒れこみながら、イライラした様子で声を上げジタバタしている。

そのみつともない姿に、同僚たちは呆れ、子供のように駄々をこねて転がり回る彼を止めようとする。

「おい、悩むのはいいが、ここで暴れるのはやめてくれないか。集めたデータがバラバラになるじゃないか。」

「むしろ俺だって暴れたいぐらいなんだぞ。邪魔だから、やるなら外へ行ってやってくれ、イライラする。」

さすがに2対1では分が悪いと思ったのか、彼は転がりまわるのをやめ、今度は仲間たちに向かってノイズ源がつかめない苛立ちをぶつける。

「はいはい分かりましたよ。けどな、そうやってデータとにらめっこしてるお前らは解明の糸口がつかめたのか？」

「つかめるわけないだろ。だからこうやってデータを調べてるんじゃないか。」

確かに、彼の同僚の言葉は正論である。しかしながら、記録されたデータの調査も、すでに4回目となっており、同じ記録を何度も見返す作業に、疲れが生じ始めていたことも確かであった。

さすがに、ほかの2人も彼の言いたいことは分かっているが、それを今まで口に出したことはなかった。苦労しているのが自分たちだけではないことを知っているからだ。

「お前の言いたいことは分かるけどさ、七木の連中だって、このくそ暑い中を歩き回ってがんばってるんだ。俺たちだけがブーブー言っへコタレてるわけにはいかないだろ？」

「・・・・・・・・」

これには、今まで苛立ちを露わにしていた彼も口を閉ざすしかなかった。七木アンテナの作業員は炎天下の中、計器やアンテナの再チェックや部品交換を繰り返していたからだ。

しばらく沈黙が続いた後、彼は愚痴を吐くことをあきらめたのか、ふうっ、という大きなため息をひとつついて、データの再チェックを開始したのであった。

ノイズ調査は一向に進展する気配を見せず、ついに18日目の朝を迎え、各々の疲労はピークに達しようとしていたが、事態収拾の転機は、思いもしない意外なところから訪れることになった。

接触編1（後書き）

思ったよりアンチ、ヘイト作品が少ないと感じましたので稚拙ではありますが、

以前書いていた作品を改定しつつ投稿してみることになりました。

リリカルなのはシリーズは人気のある作品なので、正直こういったジャンルの

SSにどの程度需要があるかはわかりませんが。

接触編2（前書き）

このSSは無印開始前に分岐したif物としてお読みください。また個人的になのは無印以外すべて見たことがあります。知識はすべてネット上から得たものだったり筆者の妄想で出来ていたりします。それとこのSSはアンチ・ヘイト作品です。各キャラや作品に強い思い入れのある方は絶対にご覧にならないことをお勧めします。あと筆者はSSを書くのが今回初となるため、矛盾や、文書の構成などにおかしな点が多々見受けられると思います。その辺を理解した上で、それでも構わないという方のみSSをご覧ください
さい 以上

接触編 2

東京ドームをさらにスケールアップしたような巨大な空間の中で、大勢の人々が思い思いに近くの人々と言葉を交わしざわめいている。

この円状空間のちょうど中心に、他の席すべてから見渡せるような壇が設けられ、その席に一つの人影が上ってゆく。

影は壇上に登りたつと、その上には講演者のフォログラムのようなものが映し出され、いまだ収まらない聴衆のざわめきを収めるため一声発する。

『
*****、*****、*****、*****、*****
*****。』

空間が広すぎるためか、それとも聴衆のざわめきのためか、その声を明確に聞き取ることができない。

しかしながら、列席している人々は一糸乱れぬ動きで席を立ち、一斉に敬礼のような姿勢を取る。

【改訂】管理局戦争 序章 接触編2

18日目の朝、野崎山宇宙電波観測所には、七木アンテナから数人の技術者や作業者が、従来要員との交代のために新たに派遣されてきていた。

研究所まで先頭を走っていた白いトラックの荷台から、七木アンテナの作業員たちが数人がかりで大きな木箱を運び出そうとしている。

新しく到着した計測器などを含める交換ノ補修部品などであるが、作業員たちに随伴してきた技術者が遠巻きにそれを見ながら注意を促す。

「 おゝい、落とさないよう気をつけてくれよ。そっちの部品は衝撃に弱いものも入ってるからね。」

「 分かってますって、私たちだって伊達に何年も組み立て作業やってるわけじゃありませんよ。」

作業員たちにしてみれば、何をいまさらな話である。実際に現場に立って製品をいじくる作業など、彼らのほうが場慣れしている。

既存の製品に関して言えば、下手をすると技術の人間よりも、発生するトラブルに対して原因を把握している場合があるほどなのだ。

しかし、そんな彼らをもつてしても、今回の原因はまったくといっていいほど検討がつかない。

それは技術を含めた七木の職員全員に対して言えることなのだが・
・
・

そうこうしている間に、入れ替わりで本社に戻る作業員たちが、荷物を抱えて彼らの降り立った研究所の玄関までやってくる。

どうやら入れ替えで、今まで研究所につめていた作業員たちが本社まで帰るようだった。

疲労困憊の彼らが、がやがやと同僚たちに声をかけ他愛もない話をしている中で、今まで現場をまとめていた帰宅組みの年配作業員が誰かと話をしていた。

「まさかお前までこっちに来るとはなあ。いまさら何を好き好んで現場まで足を伸ばしてくるんだか。」

年配の作業員がガハハと笑いながらも一方の人物に褒めとも、貶しともつかない言葉を浴びせると、

声を掛けられている当の人物も、怒った様子もなく、その白髪交じりの頭をぼりぼりとかきながら、顔をひしゃげたかえるのようにさせて答える。

「何言ってるんだい、こいつの基礎を設計したのは僕だよ。君よか物は知ってるつもりだぞ。」

彼はそういいながらニヤリと笑うと腰に手を当て、何かがびっしりと書かれた書類の束をバツバツサと、年配の作業員の前でわざとらしく上下に振り回す。

年配の作業員は、目の前に立つ自分と同年代の技術者に対して、そう言えばそうだったと、作業帽に手をやってまたガハガハと笑う。

「そんなにお前さんが現場に出てきたら、後進が育たないだろう。ロートルはゆっくりお茶でも飲んでればいいのに。」

「僕だってね、そうしたいのは山々だけど、納品先がお国じゃあ
そもも言ってもらえないだろう。うちの信用問題にかかわってくるか
らね。」

そういつて白髪頭の技術者は廊下の長椅子に腰を下ろす。彼の言う
ことは尤もであった、国家事業にかかわる仕事を受注しているのだ
から、

もしもこれで「原因が分かりませんでした」で終わってしまったては、
次の受注が絶望的どころか、今まで七木が築きあげてきた信用が地
に落ちてしまう。

七木の社員たちを路頭に迷わせないためにも、それだけはなんとし
ても防がねばならなかった。

それは年配の作業員にも分かっていたことだ。交代の要員が到着す
るまで、彼は考えられるすべてのことをやったつもりだった。

「確かにそうなんだが、それにしても参った。今回のトラブルは正直さっぱりだよ。点検や、怪しそうな部品の交換は一通りやったんだが。」

真剣な面持ちで年配の作業者はため息をつく。

設備や部品のチェックを繰り返したものの、結局彼は原因の特定どころか、その目星さえつけることができなかったのだ。

2週間もの時間を掛けたにもかかわらず、何も分からずじまいの状態である。後任の助けにもならない己の不甲斐無さを彼は恥じていた。

年配作業者の落ち込んだ雰囲気気付いたのか、白髪頭の技術者は椅子から立ち上がり、真剣な表情で彼の肩をポンとたたく。

「何言ってるんだ。君のおかげで設備の構成自体に問題がないことが分かったんだ。決して無駄じゃない。」

「……すまん、気を使わせてしまったな。」

彼はそういつて苦い笑みを浮かべ、技術者のほうも表情を崩して今度は二人で長いすに腰を掛ける。

そこからは、他の社員たちと同様にしばらく他愛もない話をしていると、技術者のほうが、ああそういえばと何かを思い出す。

「そういえば、この前居酒屋で偶然大尉殿に会ってな。今度みんなが集まるうって話しになったんだよ。」

「本当か？ いやはや、大尉殿とは懐かしいな。最後にあったの

は何年前か……、もういい御年だろう。」

「それはそうだ、通信兵の若造が今では40も半ばのいいおじさんなんだからな。」

そう言っつて二人は笑い出す。どうやら彼らは旧日本帝國軍の関係者のようであった。昔を思い出しながらカラカラと笑っていると、

研究所の長い廊下の奥から、カツカツと誰かがこちらへと歩いてくる靴の音が聞こえる。

ちらりと見えるその姿が、研究所の事務員のようなことから、どうやら七木の交代要員を仮眠室まで案内するためにやってきたようだ。

二人は長椅子から立ち上がりると、お互いに挨拶を交わす。

「それじゃあ、悪いが先に帰らせてもらつよ。後のことはよろしく頼む。」

「ああ、任されたよ。安心して待っていてくれ。」

冗談交じりの短い挨拶が済むと、年配作業員は荷物を片手に、玄関の社用車へと向かって歩き出していた。

白髪頭の技術者は、しばらく彼の後姿を見送っていたが、不意に足音が止んでいることに気がつく。

それと同時に彼に対して後ろから声がかかる。

「あの、七木アンテナの交代要員の方ですよ。責任者の方はどなたでしょうか？」

彼が振り返ると、後ろにはまだ若い20台前半ぐらいの女性職員が立っていた。自分の子供と同一年ぐらいのその職員に、彼は丁寧な答える。

「ええ、私が責任者です。」

そこから、お互いに簡単な自己紹介を終えると、彼女が仮眠室までのルートを案内してくれると告げる。

「おい、みんな、荷物はまとまっているかね？　これから移動するからついてきてくれ。」

彼がそういうと、廊下においていたダンボールやら木箱を、若い作業員や技術者たちがわらわらと持ち上げ始めた。

それを確認した白髪頭の技術者は、早速彼女に道案内をお願いする。

「それでは、案内をよろしくお願いします。」

「かしこまりました。それでは、どうぞこちらへ。」

彼女に案内され、七木の社員たちがスリッパに履き替え、いつせいに動き始める。

長い廊下をしばらく歩くと、横の窓から七木の大型アンテナが姿を現す。

その巨大なアンテナを視界に納め、敗戦から二十数年、日本は良くぞここまで復興を果たしたものだ。彼が感慨にふけっていると、前

を歩く女性職員から声を掛けられる。

「大きなアンテナですね。私もここへくるまであんなに大きなアンテナがあるなんて知りませんでした。」

「国内にある宇宙観測用のアンテナでは最大級のものですからね。私たちも、あれを作るのは結構苦労しましたよ。」

ころころと笑う彼女の表情に、自分の子供の姿を重ねた彼もまた、硬い表情を崩しながら他愛もない話をしつつ廊下を進んでいた。

接触編3（前書き）

このSSは無印開始前に分岐したif物としてお読みください。また個人的になのは無印以外すべて見たことがあります。知識はすべてネット上から得たものだったり筆者の妄想で出来ていたりします。それとこのSSはアンチ・ヘイト作品です。各キャラや作品に強い思い入れのある方は絶対にご覧にならないことをお勧めします。あと筆者はSSを書くのが今回初となるため、矛盾や、文書の構成などにおかしな点が多々見受けられると思います。その辺を理解した上で、それでも構わないという方のみSSをご覧ください
さい 以上

性急に動きすぎる多数派の議員たちに、慎重さを求める声が大勢を占めている。

彼ら慎重派にとっても、今回の議題は渴望していた内容であったのだ。

『ソウハ言ツテイナイ、モウ少シ時間ヲ掛ケルベキデハナイカト
言ツテイルノダ。』

『ソノ通りダ。性急ヲ接触ハ、混乱ヲキタス恐ガアル。警戒サレ
テシマツテハ元モ子モナイ。』

慎重派のこの言葉に、今まで急進的な役割を担ってきた推進派の議員達から声上がる。

『 シカシ、彼ラハステニ宇宙文明ノ初期段階ニ達シテイルデハナイカ。』

『 ステニ我ラノ存在トテ、想定ノ内ダト思ワレルガ？』

かつて自分たちがそうであったように、彼らもまた自分たちのような存在が居ることを相手が認識していることを前提に話を進めていた。

『 ソレハ我々ノ考エニシカ過ギナイ。』

『 相手ハレッキトシタ文明ヲ確立シタ主権国家ダ。』

『 イキナリ姿ヲ現セバ、彼ラノ警戒心ヲ煽ルダケダロウ。』

『 ナニヨリ、領空侵犯ニナツテシマウ。』

『 彼ラニハ法ガ在ル。ソレヲ破ルコトハ許サレナイ。 』

慎重派の議員達は、推進派の行為が彼らの尊厳に傷つけるのではないかと懸念していた。

【改定】管理局戦争 序章 接触編3

長い廊下を抜け、階段を上ると、すぐ右手に仮眠室と書かれたプレートがその目に飛び込んできた。

それまで談笑していた女性職員が、こちらですと手招きして扉を開ける。

白髪頭の技術者は、それに従い部屋の中に入るが、室内の光景に思わず言葉が詰まる。

「こんにちは、このたび七木アンテナから……………」

各種データなどが記された用紙らしきものが、部屋中いたるところに散乱する室内に思わず顔を引き攣らせ、彼が棒立ちになっていると、

先入室していた女性職員が、申し訳なさそうに彼を見やる。

「すいません。かたずける度に、あの、すぐにこのような状態になってしまうので、その……………」

何かあきらめたような彼女の表情に、自身も似たような経験がある

技術者は苦笑しながら気にしないでくれと伝えていると、

部屋の奥から、よれよれになった白衣を着こんだ人物が姿を現す。

「やあ、どうも、待ってましたよ。貴方が七木さんの交代要員の方ですよ。申し遅れました、私は……」

白衣の人物は、簡単に自己紹介を済ませると、テーブルの上に積み重なっている記録用紙の束を無造作に床に置き、

廊下で待っている七木の職員を手招きし、入室を促す。

「おはよう、どうぞどうぞ。皆さん、朝も早いうちからようこそいらしてくださいました。」

彼はテーブルの椅子を引き、七木の職員達に着席するよう進める。

そうこうしているうちに、部屋の奥からさらに2人の研究員がそのそとテーブルに向かって歩いてくるので、彼らは席から立ち上がり、

それぞれに自己紹介を済ませると、ようやく全員が落ち着いて席に着く。

「 あっ、君、お茶。 」

先に自己紹介を済ませた研究員が、女性職員にお茶を用意するよう声を掛けると、彼女は一瞬顔をピクリと引き攣らせて部屋を出ていく、

それを見ていた2人の研究員があゝあ、という顔をしたので、多分、部屋を散らかしたのは彼の仕業だろうと、白髪頭の技術者は当たり

をつけ苦笑いする。

ずいぶんと自由な風潮の研究所だなあと彼は思う。普通の会社であればこのような反応は無いだろうとも。

どちらにせよ、ここは一般企業ではなく国の研究機関なのだから、こんなものなのかなと思いつていると、待ち切れなかったのか、研究員の一人が紙の束を机に広げ始める。

「早速で申し訳ありませんが、まずは簡単に現在分かっている状況の説明を行わせてもらおうと思います。」

彼の説明内容を要約すると以下の3点となる。

1) 18日前の昼から、突然計測されるデータにノイズが乗り始めた。出力されるノイズデータにはある一定の時間帯に出力される周期性が見受けられる。

2) 交代前の七木職員による調査で、ハード的な問題が無いことは分かっている。

3) 1/2を踏まえ、電子回路に何らかの干渉が起きてノイズが発生しているのではないかと研究者達は考えている。

何のことは無い、すでに年配の作業員から提出されていた報告書の内容と変わることはなかったため、要は再確認を取らせようとしているだけだろうと技術者は考えていた。

面倒なように見えるが、現状の再確認という作業は意外と重要である。分かっている心算で動きだしたら、実は違っていましたという話は意外と多いのだ。

しかしながら、今回ばかりは社の信用を掛けた内容であるだけに、実際にノイズが出力されているデータへと気がはやっていた。

記録用紙を確認するとなるほど彼はうなずく、報告書にあるように、確かにこれらのデータは周期性を持ったもののように見受けられる。

「他のデータも見せてもらえますか、まずはほかのデータとの整合性を確認してみたいのですが。」

白髪頭の技術者が研究員に問いかけると、データを広げた研究員が待つてましたといわんばかりに、小脇に抱えた紙束を開いてゆく。

「まずはじめにノイズが確認された日のデータから順に並べていきますが、どうもこのノイズには、周期以外にもある一定の規則性のようなものが見られるんです。」

彼はそういつて、並べられた記録用紙の上を指でなぞるように移動させると、説明を受ける七木の技術者／作業者達も、その動きを目

で追っていく。

すると不思議なことに、確かにノイズの波形が3日ごとに同じ箇所
で反応していることが分かる。

それが一つであったならば、まだ偶然近い値を示したただだろうと
結論付けることもできたのだが、すべてのデータが3日おきにほぼ
同じ値を示していることから、うなずかざるをえない。

仮にこれが回路上の問題でなるのなら、時間帯によってノイズが出
力される周期に関して理由はなんとなく分かるのだが、出力される
データに見られるこのおかしな規則性に関しては首をひねるばかり
である。

「調べていないので詳しいことは分かりませんが、通常であれば
すべてのデータが共通するか、もしくはバラけるかのどちらかなん
ですが……」

技術者の過去の経験では、このような事例に遭遇したことはなく、テーブルに広げられた記録用紙を睨めながら、眉間に皺を寄せうむむと呻りこむ。

それを見ていた研究員は、困ったような表情を浮かべながら頭に手をやると、ぼりぼりと掻くようなくさをとりだす。

「やはりそういう結論に達しますか、いえ、私達の行き着いた答えも実はそれなんですよ。」

まあ、そうなるだろうな。技術者はそう思いながら、研究員に視線を向ける。

とにかく、この奇妙な規則性を有するノイズの発生源を突き止めなければならぬのは事実であり、そのために自分はここに来たのだと。

「社で調べた限りでは、設計上問題があるとは思えませんでしたが、実際に現状の確認をしてみないことにはなんとも……。」

「後ほど設備の設置箇所へご案内しますが、朝も早かったですよ。これからのこともありますし、まずは寛いで下さい。」

研究者はそう言って、拠点となる仮眠室やその周辺の生活設備などの説明を始めるのだった。

接触編4（前書き）

このSSは無印開始前に分岐したif物としてお読みください。また個人的になのは無印以外すべて見たことがあります。知識はすべてネット上から得たものだったり筆者の妄想で出来ていたりします。それとこのSSはアンチ・ヘイト作品です。各キャラや作品に強い思い入れのある方は絶対にご覧にならないことをお勧めします。あと筆者はSSを書くのが今回初となるため、矛盾や、文書の構成などにおかしな点が多々見受けられると思います。その辺を理解した上で、それでも構わないという方のみSSをご覧ください

接触編 4

研究員から、施設の説明を一通り受け終わった七木アンテナの職員達は、室内に運び込んだ手荷物の中から、しばらくの間仮の家となるこの仮眠室のロッカーへ、生活用品などをしまいこみ始めていた。

白髪頭の技術者は、研究員から借り受けた記録用紙を眺めつつ、今日やるべき事を日程にまとめようかと考えていると、先ほど退室した女性職員が、お茶を載せたお盆を持って部屋に入ってくる。

「失礼します。お茶をどうぞ。」

そう言って、彼女は乱雑に記録用紙が並べられたテーブルの上にお茶受けを置いていく。

彼は大事な記録にお茶をおこぼしてしまっただけだと思っただが、当の研究員はそんな事など気にする風も無く、宛がわれたお茶を飲み始めている。

異常の証拠が記録された書類を扱うにはいささかぞんざいに過ぎるのではないか？ そう思ったが、彼らの目の下に出来た隈を見ては仕方がないかとも思う。

徹夜続きだったのだろう。国家事業の一環なのだから、彼らに掛かる精神的な重圧も相当なものになっているはずだ。

日本国が宇宙進出の先駆け、彼らに課せられた使命は大きい。果たして、私だったらこの重圧に耐えることが出来るだろうか？

米国に対する政府の持つ敵愾心は、敗戦後なりを潜めたかのように見えるが、その実、戦前よりも酷いものになっているからな。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

- - - - -

敗戦前からそうであったが、元々、日本人はアメリカという国に対してあまり良い感情を持っていない。

太平洋戦争の敗北もそうであったが、時代をさかのぼれば、おそらくそれは黒船の来航にまでたどり着く事だろう。

しかし、国民の深層意識へ米国に対する決定的ともいえる負の感情を植えつけたのは、日本人の精神的支柱であった昭和天皇に人間宣言をさせたことだった。

アメリカという国家は半世紀後、その事を後悔する事になる。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

白髪頭の技術者は其処まで考え、一度ぶるつと身震いしてから、その考えを放棄する事にした。

「あの、どこか具合でも？」

技術者の目の前に、お茶を差し出ししながら、心配そうに彼女がそう訊ねてくる。

一連の動きを見られていたらしい、彼はばつが悪そうに苦笑いを浮かべながら何でもない事を彼女に伝えたと、暖かそうに湯気を上げるお茶へと手を伸ばす。

日本茶独特の苦味を感じながら、ゆっくりとお茶を飲んでいたが、隣に立つ彼女の気配が消えることなくとどまっている事に気が付く。

不思議に思った彼が、彼女のほうに顔を向けると、その視線は、テーブルの上に乱雑に並べられた記録用紙の紙束に向けられている。

技術者は疑問に思い、彼女に声をかける事にした。

「……………？ どうされました？」

彼女は突然声をかけられた事に少し驚きの表情を見せ、すぐに困ったような苦笑いを見せる。

さっきは自分もこんな表情をしていたのだろうか？

彼はそんな事を考えながらも、普段であれば日常の「こま」として流してしまつような、彼女のその行動が何故か気にかかり返答を促す。

「何か、気に掛かることでもありましたか？」

自分の娘に語りかけるように、にこりと笑いながらそう訊ねる技術者に対して、彼女は尚も困ったような苦笑いを浮かべながらも、ポツリとつぶやく。

「あつ、いえ、別にたいしたことでは無いんです……ただ、なんとなくですけれど。」

仮眠室の掃除や片づけを以前からこなしていた彼女は、このノイズデータを目にする機会が多比較的多かったため、そのたびに何かに似ていると思っていたらしい。

今日再びこのデータを目にした事で、彼女はその何かを思い出していた。

「こちらに書かれているものが、何かの記号の様に見えてしまっ
て。」

確かに、言われてみれば似ていないこともないか、顎に手をやりな
がら、しげしげと彼女の視線の先にあるデータに目をやるうとする
と、その先には何とも微妙そうな顔をした研究員がこりらを見てい
る。

聞くつもりはなくとも目の前で行われている会話だ、当然彼の耳に
も入るのは当たり前のことだろう、答えを聞いた研究員は、若干あ
きれ気味の表情で顔を上げると、苦笑しつつも口をはさむ。

「記号、記号ねえ。うん、まあ確かに、言われてみれば似て
ると思っけど……。」

偶然そう見えるだけなんじゃないかな？ 研究員はそう続けようと
したが、それより先に、当の本人から彼がぼやくつもりだった言葉

が発せられる。

「単にそう見えたというだけですから、私には。」

そう告げる彼女に、白髪頭の技術者はどうせ休憩中なのだからと、なぜそう思ったのかを訊ねてみる事にした。

「でも、どうしてそう見えたんですか？」

「そうだね、私にもその発想は無かったし、ちょっと興味はありますね。」

技術者の問いに、研究員が賛同する。

確かに彼女の答えは発想の飛躍ではあるが、時としてこのような本筋から逸脱したとも思える考えが、問題解決の鍵になる事があり、事実そのような手法が存在している。

彼らは、彼女がそれに至った経緯が気になったようだった。

しかしながら、訊ねられた彼女は、少し困ったように、うんとう考える素振りを見せる。

彼女の様子を見ていた技術者は、もしかしたら、してはいけない質問だったかなと、配慮に欠けていたかもしれない自分の問いかけに若干後悔したが、

当の本人は技術者の心境など余所に、まあいつかと、表情を切り替える。

「妹が居るんです。目が不自由な子なので、結構可愛いんですよ、お姉ちゃん子で。」

「へえ、妹さんが居たんだ。」

初耳だねと研究員が言うと、言ってませんからと彼女が答える。あまりお互いに関心が無いのかなと技術者は思ったが、それは彼らの関係なのだから特に口にする事もなかった。

「だから点字や音楽ってことかい？」

今まで出ていたワードを整理し、その結果見えてきた答えを訊ねてみた。

ああ、なるほど、研究員の問いかけに、白髪頭の技術者は納得する。

失礼な考えかも知れないが、盲目の方ともなれば、おのずと楽しみなどは限定されてしまうのではないか。

恐らくは、選択肢の中の二つとして、彼女は妹とのコミュニケーション手段に、音楽というジャンルを選んだのだろう。

「ええ、少しでも喜んでもらいたくて。私も好きでしたし、音楽の成績は良かったんですよ。」

笑顔で誇らしく語る彼女に、さしもの研究員も空気を読んだのか、当初のような表情はせず、それ以上意見は述べなかった。

接触編5（前書き）

このSSは無印開始前に分岐したif物としてお読みください。また個人的になのは無印以外すべて見たことがあります。知識はすべてネット上から得たものだったり筆者の妄想で出来ていたりします。それとこのSSはアンチ・ヘイト作品です。各キャラや作品に強い思い入れのある方は絶対にご覧にならないことをお勧めします。あと筆者はSSを書くのが今回初となるため、矛盾や、文書の構成などにおかしな点が多々見受けられると思います。その辺を理解した上で、それでも構わないという方のみSSをご覧ください。以上

接触編 5

室内ではしばらく彼女の妹自慢が続いていたが、白髪頭の技術者含め、一同はいい加減うんざりしてきていた。

彼がさすがに女性の話は長いものだと考えていると、向かいに座っている研究員も同意見だったのか、彼女の話が一息ついたところを見計らって、話題を元のノイズに関するものに変えようと口を開く。

「でも、肝心のノイズに関しては分からない事が多いですね。」

その言葉に、七木アンテナの若い作業者がうんうんと相槌を打つ。

「確かに、今は原因の調査中ですから……、ですが納品先でのトラブルに関しては、必ず解決する方向で動いておりますので。」

これを聞いた白髪頭の技術者もそれを捕捉するよう言葉に付け加える。

「弊社といたしましても、今回のトラブルを解決するために総出で動いております。ご安心ください。」

この言葉に、先ほどまで事務の女性に話を振っていた研究員は満足そうにうなずきながら、自身たちも七木アンテナの社員に協力する旨の言葉を返す。

「いやはや、ありがたいお言葉です。私達も門外漢ながらいろいろと協力させていただきたいと考えていますので、何かありましたら遠慮なく声を御掛けください。」

そこまで言い切ると、彼はテーブルに両手を付いて頭を下げる。

研究所内に関してはどうかかわらないが、少なくともこの研究員は外部に対しては協調性のある人物のように見受けられるため、技術者は好感触を抱いていた。

七木の取引先すべてが、今回のような対応を取ってくれるわけではない。

実際トラブルが起きれば、頭ごなしに文句をつけてくる客先とであるのだ。

それに比べれば、こちらに対する協力まで申し出てくれているのだから高待遇に決まっている。

彼らのためにも、何と少しでも問題を解決しようという気になってくるのも当たり前の話だろう。

「いえ、そんな、こちらこそ至らないばかりに……」

研究員の態度に関心しながら、白髪頭の技術者も頭を下げ、研究員と二人で笑い声をあげる。

それを見ていた女性事務員も、ニコニコと笑っているが、時折記録用紙の方に目が行っているようだった。

しばらく笑っていた彼らだったが、彼女の様子に気がついた研究員が、再度彼女に話題を振る。

「どうしたの……、ああ、このノイズ、そんなに気になるかい？」

不思議そうな顔で研究員が彼女に問いかけているが、彼女は若干慌てながらペコペコと頭を下げた。

「 あっ、すつすみません。 」

「 いいよいいよ。別に機密ってわけでもないんだからさ、やっぱり妹さん関係？ 」

他の研究員たちが、振らなきゃいいのにまた振りやがってという顔をして、彼に対して視線を向けている。

また話が長くなりそうだな、技術者はぼんやりとそんなことを考えながら、目の前に出されている麦茶に手をつけ、一口喉へ流し込んでいた。

その間も二人の会話は続いている。

「 最近は弾けるレパートリーを増やしたいかなって思ってるんです。それに、そろそろオリジナルの曲にも挑戦したいなって。 」

研究員はフムフムとうなづきながら、左手でぽりぽりと頭を掻くと何やら一人で納得している様子だった。

「それでインスピレーションを得たいと？」

彼の答えに、彼女は満足そうにええと答える。

目の前で行われていたやりとりに、技術者の方は、結局この二人は仲がいいんだろうか？それとも悪いんだろうか？

ふとそんなことを思ったが、他人のことをあれこれと詮索すべきではない、そう思い、すぐに考えを捨てると、再び冷えた麦茶が注がれた湯呑に口をつける。

白髪頭の技術者が、出された麦茶を飲み終わる頃には、二人の会話も終わりに近づいているようであった。

「じゃあ、たとえばこれなんかどうだい？」

研究員が一枚の記録用紙を手に持ち、彼女へと手渡している。

どうやら記録されているノイズを楽譜に見立てた場合、アレンジも含めて、例えばどんな曲になるのだろうか？

そんな興味から話の流れが作られているようだ。

彼女が記録用紙を楽譜に見立てて音階をつけ始めた。

「うーん、これはド、これなんかレに見えますね。」

こんな調子で2枚目3枚目と、どんどん音階をつけていく、周りの人間は比較的年齢の若いものが多かったため、この話題の内容に興味をひかれているようだったが、

彼自身は歌と言えば軍歌やクラシック音楽であり、最近の歌謡はいまいち好きになれなかったため話題に興味が無い。

そのため話に加わることもなく、ぼんやりと今後の調査日程について考えを巡らせる。

そうこうしている内に、どうやら記録用紙に音階をつけ終わったよ
うで、彼女が出来たと声を上げる。

「ふん、凄いもんだね。」

研究員が素直な感想を述べると、彼女は若干嬉しそうにはにかみながらこう提案してきた。

「じゃあ、試しに歌ってみましょうか？　といっても、音程を合わせて声を出すだけですけど。」

これには七木も研究所の職員も関係無くどよめく、何といても周りは若い男ばかりなのだから、こんな山奥で女性の歌声を聴けるとあれば喜びもするだろう。

それが若くて可愛かったのだから、なおさらのこと彼らの熱の入り様は推して知るべしである。

「コホン、それでは。」

彼女は喉を鳴らすと、先ほどまで音階を付けていた楽譜を眺めながら発声し始める。

しばらく彼女の声を聞いていると、聴衆の中から次第に不思議そうな表情をするものが現れ、しきりに首をかしげている。

声を出している当の彼女本人も不思議そうな顔をしながら歌い続けている。

「気のせいかもしれないけど、なんかこの曲、どこかで聞いたことがあるような気がするんだけど。」

七木の若い作業員がぼつりとつぶやくと、聴衆の中からああ確かにとうなずくものが何人か。

やがて曲が終わり、音階が紡ぎだされるのが終わると、彼女は苦笑いのような、迷ったような表情で皆が不思議がっていたものの答えを口にした。

「この曲、メダカの学校ですよ……。」

接触編6（前書き）

このSSは無印開始前に分岐したif物としてお読みください。また個人的になのは無印以外すべて見たことがあります。知識はすべてネット上から得たものだったり筆者の妄想で出来ていたりします。それとこのSSはアンチ・ヘイト作品です。各キャラや作品に強い思い入れのある方は絶対にご覧にならないことをお勧めします。あと筆者はSSを書くのが今回初となるため、矛盾や、文書の構成などにおかしな点が多々見受けられると思います。その辺を理解した上で、それでも構わないという方のみSSをご覧ください。以上

接触編 6

室内をなんとも形容しがたい不思議な空気が支配する中、彼女に相槌を打っていた研究員が口を開く。

「ははっ、偶然、偶然だよ。だってそんな馬鹿なことあるわけ無いじゃないか。偶然そう見えたただだよ。」

「そっ、そうですねえ。いくらなんでも映画じゃないんですから！」

若干苦笑いの中に、引きつる様子を見せながらも偶然を連呼する研究員、その言葉に、歌を歌っていた彼女が同調する。

しかし、その会話にあった『映画じゃない』、その言葉を発した彼女の中に、ある想像が生まれていることを周りの者たちは気づく。

有り得ないと、理性的な部分が否定しつつも、もしやと言う低い可能性、その疑念を晴らすことが出来ない。

開け放した窓の外からは、ミンミンミンミンという蝉の鳴き声が聞こえてくる。

外では直射日光が照りつけ、真夏の蒸し暑い日差しが照りつけている。

本来蒸し蒸しと肌にまとわりつく、日本特有のジメツとした暑さを感じるはずの室内にいて、彼らはなぜか薄ら寒さを感じていた。

「偶然とは怖いものですなあ。物は試しに、こちらへ符号をつけてみられては？ どうです？」

不気味な沈黙に耐えかねた白髪の技術者が、手元に置かれた別の記録用紙を彼女に差出す。

その言葉の中には、これが偶然であるのではと思う思いと、もしかと言う思いのどちらかに結論を出すような意味合いが含まれていた。彼女は、差し出された記録用紙をゆつくりと手元に手繰り寄せると、困ったような笑顔で、わかりましたと符号をつける作業を開始する。五月蠅いほどに蝉の鳴き声が聞こえているはずなのに、その室内にはカリカリカリという鉛筆の音が響き渡っている。

ゴクリと言う唾を飲み込む音が聞こえる。

緊張のあまり、それが自分の発したモノなのか、それとも自分以外の誰かが発したもののかが分からなくなってくる。

皆の視線を集めていた流れるように動いている彼女の手が、突然ぴたりと止まる。

「 とうとう、どうしたんだい？ 」

七木の若い技術者が心配そうに彼女へと声をかける。

そこで白髪 of 技術者を含めた一同は、初めて、彼女の顔が蒼白になっていることに気がつきあわてる。

「 まさか、そんな馬鹿なことって……。 」

彼女のつぶやきに、これはただ事ではない、そんな雰囲気を感じ取った一同は、一度思った疑念がいよいよ真実味を帯びてきたと気づく。

「 皆さん……信じられないかもしれませんが……これ、シヤボン玉です……。 」

先ほどよりもさらに深い沈黙が彼らを襲う。

「そつそんな馬鹿なことがつ、馬鹿なことがあつてたまるか!!
ここは日本政府の研究機関だぞつ!!」

「悪戯だつ、そつだつ! こりゃ、誰かの悪戯に決まつてるつ!
!」

沈黙に耐えかねた研究者や技術者達が口々に叫ぶ。

『有り得ない』

分野こそ違えど、彼らは一端の科学者・技術者として最先端の科学
や工学を学んできた者たちだ。

それが一体どれだけ大変なことなのか理解しているし、人類の持つ
科学力では到達できない境地に在る事を理解している。

それだけに、素直に認めることが出来ないのだ。

『そんなモノが存在しているなど』

そこからは記録されているデータを全てひっくり返し、これは？これは？と彼女に符号をつけるようお願いする者。

昔覚えたつたない記憶を引っ張り出して、自ら用紙に符号を書き始める者。

白髪 of 技術者はそんな若者達の姿を、ずいぶん面白いことになったものだと眺める。

「（戦争に負けたのは、ひとえに工業力の低さだと、人を育て、物を作り、ひたすらに歩んできた人生。」

まさかここにきて、このように面白い出来事に出会うとは。何があるか分からんものだ、人生とは。」

どこか他人事のように、敗戦から国の復興に掻けた自分の半生を振り返り、まさに総出でデータの検証を始めた彼らを見つめていた。

かなりのデータ量が在った為、結局全を検証し終えた頃には、辺りはとっぷりと日が暮れた頃になってしまっていた。

頭を抱えるもの、呆然とするもの、様々な反応を示す者の中で、白髪 of 技術者の前に陣取っていた事務の女性と、

彼女に相槌を打っていた研究員だけが、うんうんと頭を抱えながらうなっているではないか。

「 どうしましたか？ 」

その様子が気になった彼は、二人に問いかけてみる。

「 いえ、それが…… 」

「 どうしても、これだけ楽譜にならないんですよね。 」

そう言って、二人は白髪の技術者の目の前に記録用紙を差し出す。二人の会話に少し笑いながら彼はこう答え、研究員に質問する。

「おや？ 楽譜ですか？ あなたはこれを楽譜と？」

すると研究員はばつが悪そうな顔で、

「楽譜かどうかは分かりませんよ。あくまでデータとして、何かの法則性を見出すヒントにでもなればと……」

来るし言い訳を彼に返す。

確かに、渡された記録用紙には、今まで見てきたような大きな波形の揺らぎを見ることが出来ない。

しかしながら、在る一定の、規則正しい間隔をあけているという、何らかの法則性を見出すことができる。

「これはまた、難解ですね。」

彼は記録用紙を手にとると、その目を細め記録された配列を、視線をゆっくりと横に流しながら確認してゆく。

研究員は困ったように、自分の隣の記録用紙の束をスツと前に差し出す。

「実はここ2週間分の記録を、彼女と確認していたのですが、出てきたデータが傍目にはまったく同じなんですよ」

そう困った顔で、白髪の技術者に視線を移すが、彼はよほど集中しているのか、こちらを見ようとしめない。

不思議に思った研究員は、隣に並び、疲労からだろうか、目の下にクマを作っている彼女と共に首をかしげる。

しばらくすると目の前の技術者は、トントントンと、リズムカルな音を立てて机をたたき出したではないか。

「あの、どうされたんですか？」

何気なく隣の彼女が訪ねる。

それに気づかないのか、彼はボールペンを取り出し、フムフムと
なすきながら、用紙の端に何かを書き出す。

「何か分かったんでしょうか？」

彼女が研究員に尋ねるが、彼にだってわかるわけがない。

不思議そうな顔をして肩をすくめるジエスチャーをすると、目の前
に座っている技術者は、その腕にまかれた時計に目をやる。

時間はPM11:33

「うん・・・良かった。時間には、まだ間に合うようですな。」

彼は何かに納得したようにそう言うと、おもむろに立ち上がり、室
内の人間に急かすように声をかける。

「さあ、皆さん、これから建物の外に出ますよ。時間が無いです
から、急いでください。」

白髪の技術者はそのままスタスタと廊下へと出て行ってしまっただけではないか。

室内にいる者達は、何がなんだか状況をつかみきれていないが、とりあえず白髪の技術者の後を追って、次々と室内を後にしていった。

しばらくの後。

蛍光灯の明かりが落ち、静寂が訪れた室内へと風が舞い込み、テーブルに残された記録用紙をヒラヒラと揺らす。

どの位時間がたったであろうか？

突然、窓からまるでサーチライトを照らしたかのような光が室内に差し込んでくる。

その光で、ヒラヒラと舞う記録用紙が照らし出される。

・ ㊦ 日本ノ 皆サン コンニチハ 我々ハ・ ・ ・ ・ ・
㊦

嘘の様な本当の話。

高町なのはとユーノ・スクライアが会う、
実に32年前の出来事
であった。

すべての始まり（前書き）

このSSは無印開始前に分岐したif物としてお読みください。また個人的になのは無印以外すべて見たことがあります。知識はすべてネット上から得たものだったり筆者の妄想で出来ていたりします。それとこのSSはアンチ・ヘイト作品です。各キャラや作品に強い思い入れのある方は絶対にご覧にならないことをお勧めします。あと筆者はSSを書くのが今回初となるため、矛盾や、文書の構成などにおかしな点が多々見受けられると思います。その辺を理解した上で、それでも構わないという方のみSSをご覧ください
さい 以上

すべての始まり

その日、日本国首相官邸は蜂の巣をつついたような騒ぎに見舞われていた。

事の始まりは前日の深夜に起こった千葉県海鳴市での未知の大規模エネルギー反応の検出とその拡散であった。

真つ先にこの異常を捉えたのは、府中に置かれた航空自衛隊の防空司令部である。

彼らはすぐさま海鳴市上空へと戦闘機をスクランブル発進させ、早期警戒管制機を送り出している。

航空総隊司令部から報告を受けた防衛省はすぐさま首相官邸へ一報を入れ、官邸では緊急危機管理対策チームが招集された。

周辺諸国に何の兆候もないままの突然の緊急事態である。

当初はシステムエラーを含む誤報なども考慮されたが、それは帝国月面駐留艦隊司令部から同様の報告がなされたことで一気に緊張が高まることになる。

他国から未知の攻撃を受けた可能性がある中で、1億2千万という命を預かる彼らが首脳陣が強いられた緊張は相当なものであった。

ピリピリとした空気の中で、時間の経過とともに、次第に事の真相が明らかになり始める。

2004年4月12日 AM2:44 首相官邸 緊急危機管理対
策室

首相官邸の地下深くに建造されたこの危機管理対策室は、有事の際にあらゆる情報を収集し機能するまさに指令室として建造され、

目の前の大型スクリーンには、リアルタイムであらゆる情報が映し出され、各情報を解析する人員が忙しなく行き来するのが見て取れる。

その後方には円卓上のテーブルが置かれ、現在の政権を担う首相以下主だった要人たちが席を連ね、意見を交わっていた。

「では、今回発生した一連の騒動は……この魔法使いとか言う連中の仕業だということのかね？」

中央の席に座り疲れ切った表情をした壮年の男性が、いましがた新しい情報をもたらした背広姿の男性に尋ねる。

質問を受けた男性が立ち上がり、資料を片手に壮年の男性に対して説あらましを話し始めた。

「はい、過去数回にわたり国内で観測されてきた未確認のエネルギー反応に酷似していることから、ほぼ間違いないかと。」

ここで背広の男性は言葉を切り、壮年の男性、総理大臣を務める日本国首相を見やると、彼は続きを促すようにうなずく。

「事の始まりは70年代後半に施行されたスパイ防止法による全国への防諜システムの導入から始まります。」

帝国の技術を使用した防諜システムは、当初の計画通り完璧に作動し国内から他国諜報員の締め出しに成功しました。

以降この防諜システムは再編された我々公安調査庁の管轄におかれませんが、ここで新たな問題が生じます。」

「それがこの魔法使いという連中につながるというわけかね？」

言葉の途中であるが、彼の右隣に座っていた大臣の一人が口を開く。

彼、公安調査庁長官はうなずき説明を続ける。

「その通りです、正確には魔法使いではなく、彼らの言を借りるなら魔導師、という存在を確認するに至ります。」

厄介だったのは調査の段階で彼ら魔導師が、時空管理局と呼ば

れる組織に属しており、外宇宙から飛来した事が明らかになったことです。

彼らは何らかの目的があり地球圏に飛来していたようですが、80年代前半にその消息を絶っていることから本国へ帰還したものと考えられました。

当時の記録データから、さまざまな分野で彼らの魔法と呼ばれる技術の解析に努めましたが、いまだ原理は不明のままです。

以降我々は自衛隊、帝國月面駐留艦隊と協力し国内および地球圏の監視に努めてきたのですが、国外において小規模ではありますが、

同種の反応が検出されていることから、彼らは我々の知らない未知の移動方法を確立しているものと推測されます。」

ここで公安調査庁長官は再び言葉を切ると、疲れた表情で頭を抱えた首相がため息をつく。

「 もいい、結局こいつらの目的も何もかも分からないということ
は分かった。」

それよりも、今早急に解決しなければならぬ問題は国内に飛散したエネルギー体の方だった。

総務大臣が眉間にしわを寄せ、若干怒り気味に発言する。

「拡散範囲は千葉県海鳴市全域、範囲としては小規模なものかもしれないが、そのエネルギー総量は時空振を引き起こすには十分な量だそうじゃないか!？」

「こいつらはいったい何を考えとるんだ。」

彼の怒りはもつともである。

誰だって自分の住んでいる家のすぐ隣に、いつ爆発するかわからない危険な物体を見ず知らずの人間が捨てていけば怒るのは当然である。

彼の怒りに防衛大臣が答える。

「すでに航空自衛隊が動いておるし、早期警戒管制機を飛ばして余計な茶々が入らんように周囲の警戒を開始している。」

「幸い場所が千葉県だからな、中央即応集団から特殊作戦群の一部を監視・回収部隊として差し向けておるから問題はすぐに解決する。」

「だが、もしこの魔導師とやらに接触することになったらいったいどうするのだ? 相手の出方がわからん以上、

「最悪、戦争の引き金にもなりかねんぞ?」

先ほどまで黙っていた外務大臣が不安を元に横槍を入れるが、防衛大臣は取り合おうとしない。

「何をおっしゃるか、元々は連中が人様の家に爆弾をばらまくような真似をした事が原因だろう？」

我々が優先すべきことは、日本国民の生命と財産を守ることであって他国の利益を優先させることではない。」

「そうはおっしゃるが外交のm 「失礼、外務大臣。」 . . .
」

2人の議論が白熱しかけたところで、首相がそれを遮り居並ぶ重鎮たちをぐるりと見回す。

「お二人がおっしゃることはよくわかります。」

帝國側の報告ではエネルギー体の状態は比較的安定しており、すぐに爆発するような危険性はないとのことでした。

まずは監視にとどめ相手方が我々に接触を求めるようなら協力を、動きが無いようであれば我々で回収する方針で行きたいと行きたいと思いますが、

いかがか？」

今の段階において、首相の提案した内容はベストとはいえないがベターな選択であった。

議場の面々もそれに習うような発言が見慣れたことから、しばらくは様子見ということで今後の行動方針が決定された。

海鳴市には公安調査庁から多数の人員が、陸上自衛隊からは特殊作戦群が継続的に派遣され、海鳴市は事実上政府の厳重な監視下に置かれる事になる。

しかし、この玉虫色の決断がのちに起こる大惨事を許してしまう事になるなど、この時の彼らには知る由もなかった……。

すべての始まり（後書き）

作中に出てくる日時は適当に付けてます。

惨劇 前編（前書き）

このSSは無印開始前に分岐したif物としてお読みください。また個人的になのは無印以外すべて見たことがあります。知識はすべてネット上から得たものだったり筆者の妄想で出来ていたりします。それとこのSSはアンチ・ヘイト作品です。各キャラや作品に強い思い入れのある方は絶対にご覧にならないことをお勧めします。あと筆者はSSを書くのが今回初となるため、矛盾や、文書の構成などにおかしな点が多々見受けられると思います。その辺を理解した上で、それでも構わないという方のみSSをご覧ください
さい 以上

惨劇 前編

その出会いは一人の少女にとって、孤独な運命を大きく変える切っ掛け。

秘められた力に目覚め、素晴らしき仲間たちと巡り合う冒険の始まり。

彼女は自らの深層意識に深く刻み込まれた正義の心に従い、それを体現する。

歯車は回り始める。

半世紀前もの間、錆びつき、朽ち果てかけていたその歯車が。

もう動くこともないと思われていたその歯車が。

ギシギシと。

ギシギシと。

錆びついた音を上げ。

2004年4月19日

海鳴市全域にエネルギー結晶体であるジュエルシードが拡散してから一週間。

日本政府は海鳴市の外縁が山岳部であり、周囲からほぼ孤立していたことから目立ちづらい国有林に陸上自衛隊を展開させ演習の名目の元、即応体制を整えつつあった。

派遣された兵力は中央即応集団から特殊作戦群1個中隊、中央即応連隊、中央即応機甲連隊から1個大隊、第一ヘリコプター団から2個飛行隊、

さらに東部方面航空隊隷下、A H - 6 4 D J を主力とする対戦車ヘリコプター1個飛行隊が派遣され、1個旅団近い兵力が集結し戦争さながらの雰囲気醸し出している。

日本政府がこれだけの大兵力を集結させたのには理由があった。

それは海鳴市に展開している公安の監視部隊から、ジュエルシードが生物を取り込み怪物を作り出すという厄介な特性を有するという報告を受けたためであり、

また、監視システムに引っかけた異星人、ユーノ・スクライアの現地協力者である高町なのはの戦闘能力が隔絶していた事も要因の一つであったことはいなめない。

政府は最悪の事態を想定し、有事の際に武力をもって状況を鎮圧、現地協力者らを含め殲滅する事を前提に行動していたのである。

Side 公安調査庁

監視モニターで埋め尽くされた薄暗い部屋の中、2人の男性がモニターに映し出される日本家屋の一軒家を監視している。

映し出される映像は一つだけではなく、様々な角度から、家屋の玄関、庭、リビング、2階部分とその映像はモニターの数だけ存在していた。

椅子に座り、ヘッドホンを片耳にかけた監視員に、立っている方の

監視員がコーヒーを片手に話しかけている。

「それにしても、たった一週間で結晶体、ジュエルシードだったか？ 1/4を回収するとはな。」

「まあ、魔法少女様で在らせられる高町なのは様が頑張っているからだろう？ それが遅いか早いかは知らんがね。」

椅子に座っている監視員が痛烈な皮肉と共に、長時間のモニター監視で凝り固まった肩を鳴らすと、

「コーヒーを飲んでいた監視員が押し殺した笑いと共に違いないと相槌を打ちつつ、テーブルに置かれ、何度もめくられたであろう資料を手に取る。」

「しかし、このクソガキ共の交友関係、身辺関係はいつたいたいどうなってるんだ？」

マグカップを少ないテーブルのでっぱりの部分に置きながらぼそぼそとボヤクと、耳に入ったのか、椅子に座っている要員がモニターに目をやりながら返答する。

「黒も黒、全員真っ黒さ、親も友人も兄貴の彼女もな。おっと、外人さんは違ってたっけかな？」

「 黒社会で名を馳せた暗殺術の高町一家に、偽装改竄だらけの戸籍をもった月村一家、バニングスの方は・・・叩けば色々出てくるんだろうが。」

そっぴいながら彼は考える。

この環境だからこそこの行動なのか？ と。

彼女、高町なのは置かれた状況は明らかに異常であった。

ある日突然科学では説明のつかない事象に巻き込まれ、異星人の言われるがままに協力し行動を共にしているのだ。

洗脳されているのであればその行動原理に納得も行くが、収集される情報からはその兆候が無く、自発的に協力している事がわかる。

9歳児とはいえ、一般常識を学んだ事のある人間が、庇護下にある親に、警察などの公的機関に相談することもなくこのようなことができるはずがない。

ましてや死の危険性がある状況の中で、成人した大人でさえ、自身の置かれた常識外の事態に、逃げ惑うか行動不能に陥るのが普通である。

彼は資料をめぐり、何度も見返した高町なのはのプロフィール欄を確認する。

その欄の下の段には、赤字で目立つように記された項目が書き連ね

られている。

その項目のタイトルにはこう書かれていた。

精神異常、と。

嫌なものを見た、彼はそんな顔で資料の束をバサリとテーブルに投げ出す。

だが彼の表情に憐みの色は無い。

彼ら公安に属するものはこの一週間、高町なのはの行動をつぶさに監視してきたのだ。

魔法という名の破壊の力を、何の力も持たない一般市民が住む町の中で、一瞬の躊躇も無く、嬉々として使う彼女の姿を。

吐き気がする。

それがこの監視要員が彼女に抱いている偽らざる感情であった。

また、それを止めることのできない自身の立場にも歯がゆさを感じていた。

それはそうだろう、彼は元々市民の安全を守るために今の仕事についているのだ。

再びモニターに目をやろうとすると、狭い室内に突然警報が鳴り響く。

「なんだ！？ 何があつた！！」

焦った彼は座っている監視要員に何事が起きたのかと叫んだのと同じ時に、装着しているインカムに連絡が入る。

『至急至急！！ 市内中心部にて結晶体の大規模な異常反応を検知！！ 付近の要因は速やかに……………』

真っ青な顔でモニターに目をやると、監視対象である高町なのはとユーノ・スクライアが家の門を飛び出すところが目に映った。

歯車は回り始める。

ギシギシと。

ギシギシと。

錆びついた音を上げ。

舞台の幕を上げるため。

歯車は回り始める。

惨劇 後編（前書き）

このSSは無印開始前に分岐したif物としてお読みください。また個人的になのは無印以外すべて見たことがあります。知識はすべてネット上から得たものだったり筆者の妄想で出来ていたりします。それとこのSSはアンチ・ヘイト作品です。各キャラや作品に強い思い入れのある方は絶対にご覧にならないことをお勧めします。あと筆者はSSを書くのが今回初となるため、矛盾や、文書の構成などにおかしな点が多々見受けられると思います。その辺を理解した上で、それでも構わないという方のみSSをご覧ください
さい 以上

惨劇 後編

2004年4月19日 PM13:29 海鳴市中央駅前

駅構内の中央改札を出ると、すぐ目の前には少し広めの陸橋広場のような場所があり、

その左右に数本の階段が駅から市バス各路線の始発となるターミナルに繋がっている。

中央改札から陸橋をまっすぐ進み広い階段を下りると、そこには海鳴市駅前広場が広がっている。

海鳴市交通の要所であり人の往来が激しいため、その人目当てに飲食店やデパートが立ち並び賑わいを見せているが、

本日は休日、それも快晴と相まって普段よりも多くの人々の喧騒に包まれ賑わいを見せていた。

広場のあちこちで、さまざまな年齢層の人々がそれぞれに思い思いの行動にふけている。

お昼をち少し過ぎた時間帯であるが、陸橋の階段を下りたすぐ付近の飲食店数件が軒を連ねる界限では、

Blogなどでもたびたび紹介される人気のお店があり、その人気の味を求めて店に入るために、

結構な人数のお客が順番待ちの列を形成していた。

列のちょうど中心あたりに親子ずれが並んでいるのが見える。

まだ年若い夫婦だ、年齢でいえば25〜6歳ぐらいで在ろうか、3歳ぐらいの子供の手をつないでいる。

その隣には3人組の若者が、近くの家電量販店の袋を開け何やら騒いでいた。

「くう〜、バイトをガンバること早2年、やっとこの子を手に入れることができました！」

商品の化粧箱から取り出された高級そうなカメラに頬擦りする女性に、彼女の連れ合いたちは若干引いている。

「部長、確かにうれしいのはわかるんですが……街中でそれはちょっとお〜。」

「そっそっですよ、恥ずかしいじゃないですか」

ひきつった笑いを見せながら、彼女の後輩にあたる男性が部長と呼んだ女性をたしなめると、

隣にいる帽子をかぶった女性が、恥ずかしそうに小声で彼に同意する。

だが部長と呼ばれ、たしなめられた女性はそんな言葉がまるで気にならない様子で、にんまりとした笑顔を張り付けたままだ。

「何を言っておるのかね諸君！ ジャーナリスト志望のこの私が！

ようやくふさわしい相棒を手に入れたのだよ！？ これが喜ばずして何なんとする！？」

彼らは海鳴市の高校に通う新聞部の部員だった。

彼らの部は備品として一眼レフのカメラを所有していたが、それはもちろん学校の物である。

当然の如く学外への持ち出しなどできなかつたため、それを不満に思った部長は苦労の末、ようやく自身のカメラを手に入れたのだった。

部長と呼ばれた女性は上がりっぱなしのテンションと共に、手に入れたばかりのカメラを掲げ、

そのままフハハハハと高笑いを上げている。

あまりの嬉しさに周りが見えなくなっているのだろつ。

こりゃダメだ。

これがないや 普段は真面目で良い先輩なんだけどなあ。 2人は思う。

ふと隣に目をやると、親子連れがニコニコと笑顔を浮かべ子供に至ってはコロコロと笑っている。

ここは少しでも周りから突き刺さる好奇の眼差しから逃れよう。

そう心に決めた後輩2人は、部長から視線を逸らし他人のふりをし始めるのだった。

子供連れの若い夫婦は、隣で騒ぐ3人の青年たちを微笑ましげに見ていた。

「元気ですね。」

隣に佇む伴侶が、彼に向ってつぶやく。

その視線は優しげなものだ。

もしかすると彼らを見て、自分たちの高校時代のころを思い出しているのかもしれない。

いやいや、果たして自分の高校時代はこんな馬鹿をやっていたのだ

ろうか・・・やっていたな。

彼は昔の記憶を掘り下げて思い出していくうちに恥ずかしくなり、苦笑いと共に愛する伴侶に、そうだね と返す。

2人は子供のころからの幼馴染だった。

高校、大学と進み、就職が決まった段階で彼の方から彼女にプロポーズしたのだ。

泣きじゃくりながら喜ぶ彼女の姿が、今も彼の脳裏に鮮明によみがえり顔が火照ってしまふ。

そんな態度を見透かしたのか

「プロポーズの時のこと、また思い出していたんですか？」

隣の妻が、彼と同じように少し顔を朱に染めながらクスクスと笑っている。

どうやら彼にとって、その時の記憶はよほど特別なものだったらしい。

まったく、かなわないなあ。彼はそんなことを思いつつも、自分たちの愛の結晶である我が子を見やる。

「 洋一も、僕たちや彼らのように元気に育ってくれるといいね。」

「 大丈夫えすよ。洋一は貴方と私の子供ですもの。」

彼の妻は慈愛に満ちた瞳で、隣の青年達を見ながらコロコロと笑う一人息子を見つめていると、彼の携帯電話が鳴り始めた。

「 はい、もしm・・・、ああ、わかったよ。大丈夫だって・・・
・・・うん、そっちこそ気をつけて。」

夫が携帯を切ったのを見計らい彼女が声をかける。

「 お父様？」

「 っんん、なんか国のお偉いさんに急な呼び出し受けたみたいで今日はこれないってさ。」

「 研究、忙しいんですね。でも、残念です。あんなに洋一に会いたがって・・・。」

彼女がそう言いかけたその時、すさまじい揺れと、ドカンという耳をつんざくような轟音があたりに響き渡る。

揺れと轟音は断続的に発生し、そのたびに街灯や街路樹が大きく揺れ、店内に居た人々が何事かと外へ出てくる。

どこかで悲鳴が上がり、そのあまりの衝撃から、駐車してある車の防犯ベルが至る所で唸り声を上げ始める。

その音が徐々にこちらへと近づいてくる事に気づく。

不安の色を顔いっぱいに広げた妻子の手を取ると、ひととき大きな揺れと轟音があたりに響き渡る。

巨大で茶色い何かが隣のビルを突き破ってこちらに向かってくるのが見える。

彼はとつさに2人を自身の後ろ側へ突き飛ばした。

.....

.....

.....

「うんっ・・・イツツ・・・」

彼女は、側頭部から響くズキズキという鈍痛と共に目を覚ます。

視界がかすれるため、左手で顔を覆い目のあたりをこする。

キーンという耳鳴りが彼女の気持ちを一層不快にさせたが、周りの状況を認識できない不安が本能的に思考の覚醒を促す。

『・・・ぶ・・・よ・・・ぶち・・・部長!!』

徐々に視界と聴覚が戻りはじめると、目の前には泣きじゃくる二人の後輩の姿が飛び込んできた。

「部長！ 部長！ 部長！ うぐっ・・・ヒック・・・うええええええええ」

帽子をかぶった後輩が、涙と鼻水に顔をグシャグシャにしながら彼女に抱き着き泣きじゃくる。

彼女は目を白黒させつつも、いまだに状況がわからない不安感から、同じく泣きじゃくっているもう一人の後輩に何が起きたのか確認する。

「部長が跳ね飛ばされて、そしたら周りが土煙だらけで、ヒック、もっもっ、何が何だか……」

いまいち要領を得ない回答だったが、そうこうしている間に周囲の状況が見え始める。

初めに気づいたのは、薄らと周囲に浮かぶ土煙、そして響き渡る悲鳴と助けを求める声、薄らと漂う鉄分を含む生臭いにおい。

彼女の脳裏に、ある記憶が蘇る。

それは狂気に狂った殺人教団が引き起こした日本史上最悪の連続無差別毒ガス事件……。

顔から血の気が引き、完全に真っ白になった。

ブルブルと震えながら帽子をかぶった後輩を落ち着かせると、今まで介抱されていた何処かの店舗から一步外へ踏み出す。

後ろから後輩たちの狂ったような絶叫が聞こえる。

視覚が、嗅覚が、聴覚が、それらを捉えた瞬間、かつて感じた事が無いほどの壮絶な嘔吐をもたらす。

「ウ、プッグエツ、ウゲエエエエエエ、ゴッ、ツゲエエエエエエッエエエエエッエエエ」

頭上から降り注いだであろうガラス片に切り裂かれバラバラになった人。

必死に腕をくっ付けようとしている人。

腸を引きずりながら下半身を探す人。

ビルから落ちてグシャグシャになった人。

茶色い何かに押しつぶされている人。

人、人、人、人。

視界いっぱい、

地獄が広がっていた。

そこで彼女の意識は途切れる。

人の防衛本能がなせる業だったのだろう。

その後、高町なのによってジュエルシードは回収される。

自衛隊、警察、消防による文字通り死力を尽くした救助作業は2週間にもおよび、次第に明らかになる事件の全容は日本国中を恐怖と

なつて震撼させた。

地球人類が初めて経験する魔法による大規模被害。

この忌まわしき事件、後の世にいう第一次海鳴事件はこうして収束する。

夥しい数の犠牲者と共に……。

夥しい数の遺体収安置先として、海鳴市運動場が臨時の安置施設とされ、いくつものテントが建てられていた。

ある棺の前で泣き崩れる妻子。

またある棺の前では、突然娘に降りかかった不幸に怒りに拳を震わせる父親。

政府の高官と、自衛隊の高級幹部を背後に従えた一人の初老に差し掛かった男性が、

目の前に置かれている2つの棺を前に怨嗟の声を上げる。

「……………るさん……………許さんぞっバケモノ共……………」

事件が終わっても、人々の慟哭の音が止むことはない……………。

襲撃 前編（前書き）

このSSは無印開始前に分岐したif物としてお読みください。また個人的になのは無印以外すべて見たことがあります。知識はすべてネット上から得たものだったり筆者の妄想で出来ていたりします。それとこのSSはアンチ・ヘイト作品です。各キャラや作品に強い思い入れのある方は絶対にご覧にならないことをお勧めします。あと筆者はSSを書くのが今回初となるため、矛盾や、文書の構成などにおかしな点が多々見受けられると思います。その辺を理解した上で、それでも構わないという方のみSSをご覧ください。以上

襲撃 前編

鬱蒼とした山林の中を進んでいくと、唐突に、広範囲にわたって木々が切り開かれ更地となった場所が見えてくる。

こんな山奥に広がるその風景は見慣れない、山になれた人間らしてみればある意味不思議な光景であったかもしれない。

周囲はすでに夜の帳が落ち始め、もうすぐ闇が支配する世界が訪れようとしている。

更地となった元山林跡地によくよく目を凝らしてみれば、多くの、そう、多くの影が蠢いていた。

獣か？ いや、違う。

規則正しく整然としたその動きは、決して、ただのケモノに真似できるとは思えない。

空気を叩きつけ、まるでねじ伏せるかのような風切音と、甲高いうねり声のような音が木霊し、それは次々と空へと舞い上がって行った。

暫くのち、夜の帳が落ち切った頃、森は再び静寂に包まれる。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

海鳴事件

死者：1355名 行方不明者：84名 重軽傷者：14
 196名

人類史上空前の被害を出したこの魔法関連事件は、政府の嚴重な報道管制のもと、表向きはテロリストによる事件として処理された。

この時点で日本政府内部には魔法使いやその関係者に対し断固たる制裁を加えるべきとの声が強まりつつあったが、

帝國でさえ時空管理局の拠点を掴みあぐねており、管理局と魔法関係者の繋がりが不明な状況でのうかつな行動は危険であると判断した閣僚達が

それらの声を抑え込むような状態が続いていた……………。

首相官邸に置かれた大会議室で、政府の主だった閣僚と公安・自衛隊関係者が集まり、数時間に及ぶ議論を交わしている。

適度に休憩をはさんではいるが、彼らの表情には一様に疲れが目立ち、一部の者には他人にぶつけこそしないが徐々に苛立ちが募っていた。

「……………の件ですが、ネットを中心に魔法関連事件の状況が流れつつあります。」

情報通信各社には協力を要請しておりますが、なにぶん、その数が多く対処しきれていないのが現状です。」

目の下にクマを作った公安関係者が、配布した資料の説明を終えると同時に関係者の間にざわめきが起きる。

「事件に関しては多少の情報が流れたところで大きな問題にはならないだろう。おそらく、真に受ける人間は少ない。」

我々だつてどのように国民に情報を開示すればよいのか・・・
・頭痛の種なんだからな・・・。」

長時間に及ぶ会議の疲れか、こり固まった肩をもみつつ椅子の背もたれに寄りかかるように閣僚の一人が首を鳴らしながら発言する。

その発言にかぶせるように自衛隊幹部の一人が険しい顔で意見を述べる。

「問題は、この報告にある新たなグループの出現です。」

このグループは旧グループに比べ、周囲に対して強い攻撃的性情格を持ち、

固体戦闘能力においても旧グループより上だということです。

「自衛隊幹部は報告書にある月村邸で起こった高町なのはとフェイト・テストロツサの戦闘記録を指し、警戒感をあらわにする。」

報告を行った公安関係者がそれを補足するように口を開く。

「別の目的を持ったグループが接触したのですから、衝突は必然

ですが・・・接触から唐突に戦闘に突入しています。

常識的に考えれば、接触前に相手方の背後関係を確認するなどの行為が必要になるはずなのですが・・・」

彼はあくまで自らの属する公安の常識に沿って発言するが、まったく文化の異なる異星人に通用するのかに関しては不安が残っていた。魔法関連の事件が多発するようになってからというもの、ほぼ毎日のように医師から処方された薬を飲み続けている首相が、

襲ってくる眩暈に頭を押さえ、用意されているミネラルウォーターを飲み干すことでジクジクと痛む胃を誤魔化す。

「その連中は常識を無視できるほどの組織、時空なんたらに属しているか、常識が通用しない単独犯ということかね？」

どちらにせよ、なんという身勝手な連中なんだ。

内心そう思いながら、収まった眩暈の代わりに本格的な痛みを伴いだした胃に手をやりながら、首相がため息をつく。

首相の言葉を受けた公安関係者が続ける。

「いえ、組織だった動きが見られないことから、時空管理局の戦力ではないと考えられます。」

我々公安は小規模な組織、もしくは背後関係の無い少数グループによる行動である可能性が高いと考えています。」

再び周囲がざわめきだす。

その中には明らかに怒りの声を上げる者もいるが、それは当然だろう。

自国の領土の中で個人、ないしチンピラのような連中が好き勝手に暴れまわり、今なを国民の生命を脅かし、財産を破壊しているのだ。

国家の尊厳などあったものではない。

公安関係者が、ふと首相から視線を外すと、今まで沈黙していた防衛大臣が先ほどの自衛隊幹部に目配せしている。

こいつ、何かやらかす気だ。彼の直観はすぐに現実のものとなる。

自衛隊幹部が発言する。

「首相、我々自衛隊は、新たに出現した敵勢力に対し、武力行使を提案します。」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・

静寂が支配する闇夜の森。

その森の頭上が柔らかな月明かりに照らしだされ、金色と紅、2色の色が優雅に舞う光景はある種幻想的なまでの美しさを放っている。

2色の色、それはフェイト・テストロッサと彼女の使い魔、アルフの二人であった。

つい先ほどユーノ・スクライアとの戦闘を終えたアルフは、未だ戦闘の余韻が残っているのか、

若干興奮気味に自らの主であるフェイトに高町なのはたちの感想を述べていた。

「ねえ、フェイトオ、私の言った通り全然たいしたこと無い子だったでしょお」

フェイトの実力ならちよちよいのチヨイ、力の差を見せつけてやればいいのよ！」

彼女はニコニコと花が咲いたような笑顔を浮かべながら、自らの敬愛する主の背越しに優しく抱き付く。

「うん、そうだね。」

フェイトは小声で答えながら、回されたアルフの腕を優しく撫でる。

彼女はこういったスキンシップが嫌いではなかった。

自らを作り出した母親であるプレシアに、愛情というものを与えられなかったことから、心のどこかでアルフに母性を求めていたのかもしれない。

また、アルフもそれをわかっているのか、いつもオーバーリアクション気味に彼フェイトに接するようにしている。

「また・・・一つ回収できた・・・母さん、喜んでくれるかな？」

フェイトから発せされたこの何気ない一言に、アルフは胸が締め付けられるような苦しみを覚える。

アルフはプレシアが好きではなかった。いや、むしろ嫌っていた。

自らの主であるフェイトに対すして、まるで道具を扱つかのような仕打ちをまじかで見せられてきたアルフにとってしてみれば、

到底好きになれるような人物ではなかった。

もし、もしもフェイトに何かあれば、この命を投げ出しても構わない。

アルフはプレシアから、いや、親の愛情を知らぬこの悲しき少女に仇なす存在、その全てから彼女を守ろうと、悲壮な覚悟を決める。

それに反応したのが、いつの間にかフェイトを抱き寄せる腕に力が入っていることに気づく。

「・・・アルフ?・・・」

フェイトが心配そうに彼女の名を呼ぶ。

「・・・大丈夫だよ。喜んでくれるにき決まってるさ・・・」

アルフは一瞬苦悶の表情を浮かべるが、フェイトに気づかれまいと
平静を装い、優しい声で答える。

柔らかな月の光りに照らされながら、優しい時間が過ぎてゆく。

だが、彼女たちの安らぎは

『・・・! Defensor!!』

バルディッシュの声により唐突に終わりを告げる。

次に訪れたのは激しい衝撃と耳を劈く爆音。

視界いっぱい広がる赤い、赤い、破壊の炎であった。

全身がボロボロになりながらも、アルフは自らの主を守らんと、フ
エイトを抱きしめながら落ちてゆく。

暗い、暗い、森の中へ……。

そう、彼女たちは確かに実力を見せつけた。

見せつけすぎてしまったのだ。

強すぎる力には、必ず相反する力が生まれる。

それを知るには、彼女たちは幼すぎたのかもしれない。

襲撃 前編（後書き）

次回からようやく戦闘です。
はたしてうまく書けるかどうか・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7818z/>

管理局戦争

2011年12月29日02時53分発行